

近 藤 健 二*

原始ユーラシア語の残影 (1)

—「周辺」概念の変貌—



はじめに

現生人類の起源を説く学説に、アフリカ単一起源説と多地域進化説とがある。前者では現生人類は約20万年前のアフリカに生まれ、世界に広まったとし、後者ではネアンデルタール人から今日のヨーロッパ人が進化し、北京原人やジャワ原人から東アジア人やオーストラリア先住民が進化したとする。しかしこの多地域進化説は、2003年に約16万年前の現生人類の頭骨化石がエチオピアで発見されて、その根底がくつがえされた。

今や決定的に有力な説となったアフリカ単一起源説によれば、アフリカを出立した人類はユーラシア大陸の各地に散らばっていった。約6万年前に中近東あたりに進出し、約5万年前に東南アジアに、4万年前までには地続きであった今のニューギニア島やオーストラリア大陸にまで移動していたという。またそのころ、ネアンデルタール人の住むヨーロッパや東アジアの諸地域に、そしてマンモスを追って極北シベリアにも進出した。さらに、今から1万3千年前から約1万1千年前にかけて、現在の南北アメリカ原住民にあたる先史モンゴロイドがアラスカに渡り、約1万年前に彼らは南アメリカの最南端にまで達した。

現生人類があらまし上記の経緯を経て世界中に広まったとすれば、世界に散らばる幾千という言語はまさしく数万年間にわたる人類の拡散によってもたらされたものであろう。このよう

に発想したとき、諸言語の起源について一つの確信めいた考えが浮かぶ。この地球上に存在する言語はいずれも現生人類がアフリカで話していた言語と繋がっている、という考えである。これを否定することは、今生きている人間がアフリカに誕生した現生人類の子孫でないと言うのと同じくらいに難しかろう。

問題は、個々の言語が、過去に同一であった跡形をとどめているかどうかである。そして、歴史言語学という装置を使ってそれをとらえることができるかどうかである。本稿は、そのような着想のもと、「周辺」を表す語から派生したさまざまな語に関して、系統的に無縁と見なされてきた日本語と中国語と英語の間に語形成上の類似点が観察されることを指摘したうえで、それが偶然によるものでないことを論じようとするものである。

1. 考察の出発点

茫漠とした先史言語の地平を拓くには、拾い集めた事実の断片を積み上げ繋ぎ合わせて形あるものにしようとする作業が必要である。しかしこれをするには、暗黙のうちに従ってきた思考を切り替え、推理を飛躍させて異質な言語世界を見ようとする想像力が欠かせない。今から始める作業の出発点として次に示す古代日本語と中国語と英語の比較は、そのような想像の翼を広げて眺めなければ、まったく無意味な語の羅列である。

*中部大学語学センター、中部大学国際関係学部外国語教室

(1)	縁(peri)	稜(lán)「縁」	para-/par-「付近の・準」
	領巾(ðire)	領(lín)「襟」	peri-「近い・囲りの」
	辺ろ(ðero)	廊(lán)「廊下・ぬれ縁」	brim「縁」
	辺(ðe)	隣(lín)「隣」	brink「縁」
			fringe「縁」
			frill「へり飾り」
			fillet「ヒレ肉」
			list「織り縁」
			rim「縁」
(2)	端(ðana)	畔(p ^h àn)「ほとり」	fin「ひれ」
	花(ðana)	辺(piān)「縁」	finis「終わり」
	鼻(ðana)	鼻(pí)「鼻」	finger「指」
	鄙(ðina)	鄙(pī)「片田舎」	angle「角・隅」
	野(no)	野(yě)「野原」	end「終わり」
		縁(yuán)「縁」	
(3)	端(ðata/ðeta)	厠(p ^h ü)「畑」	-hedral「～の辺・面からなる」
	畑(ðata/ðatakë)	端(tuān)「端」	(Gk.hedra「側面」)
	蒂(ðeta)	田(t ^h ían)「田・畑」	
	畔(ðotori)	蒂(tì)「へた」	
	縁(ðuti)		
	辺(atari)		
	田(ta)		

上に示した(1)～(3)の語は、筆者の考えでは、それぞれ同一の源にまで溯る音節を含んでいる。これはしかし、過去数万年の間に次のような言語変化があったという仮定に立った想定である。

①アジアの言語とヨーロッパの言語が一つであった5、6万年昔の先史ユーラシア語には、「周辺的なもの」を表す語に[p]ないし[b]という子音に始まる音節が含まれていた。そしてこの音は[p/b/v/ð/f/h/w/y]などとして諸言語に受け継がれている。

②[p/b]という音に続く母音は、最初は[a]か、それに近似した音であったと考えられるが、母音交替を通じて使用される母音の種類が多彩になり、それが語彙の増大をはかるのに役立った。

③[p/b]を有する音節には、通例、-laや-naや-taや-kaなど、「場所」を表すさまざまな形態が付加されたが、これらも母音交替を通じてその種類が多様化した。

④[p/b]を含む第1音節、あるいは-la/-na/-ta/-kaなどの第2音節のすべて、または

一部がしばしば脱落した。この傾向はとくに中国語において顕著であり、その結果として、中国語では多音節語の多くが単音節化するとともに、語彙の増大をはかるための手段として音調が重要な役割を果たすようになった。

- ⑤とくにインド・ヨーロッパ語では、「場所」を表す *-la / -na / -ta / -ka* などの音節に「場所」を表す別の音節が頻繁に添加された。しかし、添加された音節の多くは母音を失った。

上で、5、6万年前に存在した音として *[p]* ないしは *[b]* を想定したが、原初的な音は *[p]* であり、「周辺」概念を表す典型的な形態は **pa* であったというのが筆者の推定である。*[p]* は容易に *[b]* や *[v]* に変化する。また上下の唇を合わせて発する両唇音 *[ɸ]* にも、さらには *[f]* にも変わりうる。現代日本語の *[h]* 音が古代日本語の *[ɸ]* 音に溯り、*[ɸ]* 音が *[p]* 音に溯ると言われていることからしても、原初的な音として *[p]* を想定するのは自然なことである。

同様に、母音交替形が存在し、それが語彙の増大をもたらしたという考えも、母音交替形を

基盤にした姉妹語、つまり上の(1)に示した「縁 (*ɸeri*)」と「領巾 (*ɸire*)」のように母音のみを異にする同一起源の語が諸言語に多数観察されることからして、きわめて自然なものである。

ところで、上の①～⑤には尋常ならざる内容が含まれている。中国語における「語の短さ」は音節の脱落による、という仮定がそれである。この仮定を支えているのは、「音」と「訓」の類似性、もう少し正確に言うと、中国語と日本語におけるきわめて多数の語のペアにおいて中国語音が日本語音にあたかも内包されているように見える、という事実である。「枯 (*kū*)」-「枯る (*karu*)」、「苦 (*kǔ*)」-「苦し (*kuruji*)」、「栗 (*lì*)」-「栗 (*kuri*)」、「倒 (*tǎo*)」-「倒る (*taoru*)」など、そのような例は枚挙に暇がない。このような類似性を偶然によるものだとするのは、あまりにも不自然である。

さて、ここで述べていることは今から考察しようとすることの「おぜん立て」であるのだが、それを補強する意味あいでも、「周辺」概念を表す形態が古代日本語と中国語と英語に姿をとめている例を追加しておきたい。

(4)	梁 (<i>ɸari</i>)	梁 (<i>liáng</i>)「梁・橋」	bridge「橋」
(5)	葉 (<i>ɸa</i>)	葉 (<i>yè</i>)	leaf「葉」
(6)	浦 (<i>ura</i>)	浦 (<i>pǔ</i>)「水辺」 埠 (<i>pù</i>)「波止場」	pier「埠頭」(<i>L.pera</i>) litoral「沿岸の」(<i>L.litus</i> 「岸」、 <i>cf.ōla</i> 「岸」)
(7)	尾ろ (<i>worō</i>) 尾 (<i>wo</i>) 穂・秀 (<i>ɸo</i>)	尾 (<i>wéi/yǐ</i>)「尾」	uro-/ur-「尾の」(<i>Gk.oura</i> 「尾」) ear「穂」

ここに示した語はいずれも、*[p]* に始まる第1音節と *[l]* ないしは *[r]* に始まる第2音節から成っていたと想定できる。(4)の「梁 (*liáng*)」は第

1音節が脱落し、(5)の「葉 (*ɸa*)」と「葉 (*yè*)」、(6)の「浦 (*pǔ*)」と「埠 (*pù*)」、そして(7)の「尾 (*wo*)」と「尾 (*wéi/yǐ*)」は第2音節が脱落した形である。

一方、(5)の leaf は、[f]を含む音節が添加された後で第1音節を消失したと推定される。同様に、(6)の litoral の源であるラテン語の litus が第1音節を失ったのも、「場所」を表す二つの音節が添加された後であったと考えられる。なお、(7)に示した語は「突き出ているもの」が原義であり、下の(8)に示す「峰・岡 (worö/wo)」などと同類である。

このように音節の添加によって語が後方に伸びていく傾向が強かったインド・ヨーロッパ語とは対照的に、大多数の語において中国語では音節が徹底的に刈り込まれ、第1音節の部分だけが残るか、第2音節の部分だけが残るかしたようである。下の(8)と(9)は、そのような変化が実際に起こったことを裏付ける格好の例であると言えよう。

(8)	峰・岡 (worö/wo)	阜 (fù)「丘・小山」	berg「氷山」(OE. <i>beorg</i> 「岡・山」)
		稜 (líng)「丘」	fell「丘原・高原地」
		嶺 (lǐng)「峰」	hill「丘」(cf.OFris. <i>holla</i> 「頭」)
		巒 (luán)「山並み」	oro-「山・高度の」(Gk. <i>oros</i> 「山」)
			ridge「尾根」(OE. <i>hrycg</i>)
(9)	母衣 (φoro)	皮 (pí)「皮膚」	pil-「毛の」(L. <i>pilus</i>)
	保呂 (φoro)	膚 (fū)「皮膚」	pelt「毛皮」
	鱗 (uroko/iroko)	羽 (yǔ)「羽」	peel「皮をむく」
		翎 (líng)「羽毛」	pellicle「薄膜」
		鱗 (lín)「鱗」	flap「はばたきする」
			flay「皮をはぐ」
			fleece「毛被」
			fur「毛衣」
			hair「毛」
			wool「羊毛」
			leather「革」

上にあげられている中国語のうち、(8)の「阜 (fù)」と(9)の「皮 (pí)」、「羽 (yǔ)」は祖形の第1音節を引き継いだものであり、(8)の「稜 (líng)」、「嶺 (lǐng)」、「巒 (luán)」と(9)の「翎 (líng)」、「鱗 (lín)」は同じ祖形の第2音節を引き継いだものである。こう考える以外に、[p]や[f]で始まる語と[l]で始まる語が非常によく似た意味を表す事実を説明できそうにない。後に引用する多くの例にも見られるように、偶然とは言えない

ほどの頻度でそのような例が中国語に見つかるからである。そしてこの種の現象は、後に例示するように、[p]や[f]で始まる語と[t]や[k]や[n]で始まる語との間にも観察される。これは、[t/k/n]の前で[p]を含む音節が消失したことによる結果であろう。

インド・ヨーロッパ語においては、[p]の音が弱化し、それが失われていった過程と、新旧の音を利用して語彙が増大していった過程をより

明確に観察することができる。(8) の ridge と (9) の leather はまさに祖形における第1音節が失ったものであるのだが、注目すべきことに、ridge は古期英語の段階では語頭に h- が付いていた。この h- は、「周辺」概念を表す原初的形態 *pa の残滓にちがいない。

「周辺」概念を表す語からどのような語が派生されたか、そして古代日本語と中国語と英語の中にその痕跡が見つかるかどうかを第2節以降で論じる前に、三つのことを補足しておきたい。

一つは、本稿で「同一起源」あるいは「同源」と言うとき、「該当する語が同一の源に溯る音節構造を含む、あるいは含んでいた」という意味でそれを用いているということである。そこ

で、たとえば(8)の berg や ridge、(9)の leather や fleece や roof のように祖形に別の音節が添加された形も、それが添加されていないものと同源であると見なす。同様に、(9)の「鱗(uroko/iroko)」も、-ko という音節が添加されているけれども、それが添加されていない他の形と同源である。一方、たとえば古代日本語の「羽(φa)」は、*-la ないしは *-ra に由来する形態を欠いているので、またかつてそれを有したという証拠も見つからないので、それを(9)にあげた語と同源であるとは見なさない。同様に、次の(10)に示す語も、第2音節に -la / -ra に由来する形態が含まれていた形跡が認められないので、(9)に示した語と同源であるとは見なさない。

(10) 肌(φada)	膚(fū)「皮膚」	feather「羽」
二つ目に補足しておきたいのは、意味的に対応する同源の語が、1) 古代日本語と中国語にあって英語にない場合、2) 中国語と日本語にあって古代日本語にない場合、3) 古代日本語と英語にあって中国語にない場合がある、ということである。過去の長い歴史の中で一つであつた言語が次々に分断されて言語の数が増え、それぞれの言語において多くの新しい語が独自に作られていったのであるから、三つの言語の一つにおいて対応する同源の語が欠けていても一向に不思議ではない。下に、そのような例を示しておこう。		
(11) 岡・丘・陸(woka)	峰(fēng)「峰」 岡(kāng)「尾根」 丘(tē ^h iū)「丘・小山」	—————
(12) —————	波(pō)「波」 浪(làng)「波」 瀾(lán)「大波」 漣(lián)「さざ波」	billow「大波」 bore「潮津波」 rip「激浪」 ripple「さざ波」
(13) 骨(φone)	—————	bone「骨」
(14) 原(φara)	—————	plain「平野」(<i>L.planus</i>) field「野・原・原野」

これらの語のうち(11)の「丘($t\acute{c}^{h}i\ddot{u}$)」について一言しておく、この語の「 t^h 」という音はかつての「k」という音が軟口蓋音化したものである。このような変化は多数の語において起こったが、たとえば「岡($k\grave{a}ŋ$)」の「k」のように軟口蓋音化しなかったものも存在する。なお、「峰($f\acute{a}ŋ$)」の「 η 」は「k」が音便化した音であると見なすことができる。

三つ目の補足は、断りと言うべきものであるが、上の(14)に示した「原(ϕara)」に関係している。この語には、たとえば朝鮮語の *pal*「原」、ポーランド語の *pole*「原」、シュメール語の *bar*「原」、ヘブライ語の *harr*「山」や *arābhā^h*「砂漠」など、世界の多くの言語にそれと同源と見なされる語が

存在する。そしてこれらの語は何よりも、地名を構成するきわめて生産的な要素となり、「フランス」、「ポーランド」、「エディンバラ」、「ペルー」など夥しい数の地名を生んだが、本稿では、「周辺」概念を表す形態が地名の成り立ちに果たした役割にはこれ以上ふれないことにする。

2. 「周辺」のイメージ

「周辺」には「周辺」特有のイメージ、いわば「反中心」を喚起するイメージがあり、それがさまざまな新しい語を派生させる原動力となった。そのような力を発揮した一つに、「原」のイメージがあった。そして、このイメージから生まれたと見なされる語の代表格は次にあげる語である。

(15) 遙か($\phi aruka$)	茫($m\acute{a}ŋ$)「茫漠とした」 遙($y\acute{a}o$)「遙かな」 遼($li\acute{a}o$)「遠い」	<i>far</i> 「遠い」(<i>Skt.pára</i>)
-------------------------	---	------------------------------------

ここに示したように、サンスクリットの *pára* は「周辺」概念を表す原初的形態をとどめているが、英語の *far* では「p」が「f」に弱化するとともに、第2音節であった部分が母音を脱落させてしまっている。一方、日本語の「遙か($\phi aruka$)」には、「住処」の「-ka」や「あそこ」の「-ko」と同類の、「場所」を表す接辞が付されている。中国語では、「茫($m\acute{a}ŋ$)」と「遙($y\acute{a}o$)」が祖形の第1音節を引き継ぎ、「遼($li\acute{a}o$)」は、祖形の第2音節を引き継いでいる。なお、「茫($m\acute{a}ŋ$)」の語頭「m」は、「茫」を日本語で「*bō*」と音読みすることからも知られるように、かつては「p」あるいは「b」という音であった。

今ここで、一つの仮定を述べておきたい。「原」のイメージから(15)の語が生まれたとするならば、つまり日本語において「原(ϕara)」と「遙($\phi aruka$)」が、英語において *plain* あるいは *field*

と *far* が姉妹語であるとするならば、中国語においても「遙($y\acute{a}o$)」、「遼($li\acute{a}o$)」に対応する姉妹語が存在したはずである。ちなみに、「原」を意味する中国語は「原($yu\acute{a}n$)」であるが、これは「周辺」概念を表す形態に溯る語ではなく、日本語の「隈($kuma$)」や「蒲($gama$)」や「山($yama$)」と同源の語である。このことについては、稿を改めて論じる予定である。

さて、「原」というのは古代人にとって住処あるいは人里から「遠い所」、「はるばる行く所」であっただけではない。それは、「原」を表す本来の漢字が「獵場」を象形するものであったことから知られるように、男たちが狩猟を行う「原野」であった。そして、「屍体の棄てられている広野」を象形する「荒」という字がイメージするような「荒野」であった。下の(16)は、そのようなイメージから生まれた語である。

(16)	荒ぶ(arabu)	暴(pào)「荒々しい」	violent「強暴な」
	荒す(arasu)	俚(lǐ)「粗野な」	brumal「荒涼たる」
	荒し(araji)	烈(liè)「激しい」	fell「残忍な」
	粗し(araji)		feral「野生の」
			ferocious「凶暴な」
			wild「野生の」
			rough「粗い・粗野な」

「原」というのが手の加えられていない「原野」であり「荒野」であったことから、さらに別の意味が派生した。すなわち、「古い」、「老いた」という意味、あるいは古くなったものが「腐る」という意味である。これが自然な派生過程である

ことは、たとえば中国語の「原(yuán)」という語が「原野・野原」とは別に「元来の・本来の」という意味を表すことによっても納得されよう。次の(17)に示した語は、そのようにしてできた語であると見なされる。

(17)	古し(φuruji)	腐(fǔ)「腐る」	old「老いた」
	旧る(φuru)	老(lǎo)「老いた・古い」	rot「腐る」
	経る(φeru)		

一方、下に示す語は、「原」が有する「平らで、広くて、遮るものがない」という特徴的な形状

が契機となって生まれた語であると考えられる。

(18)	平(φira/taφira)	平(p ^h ín)「平らな」	flat「平らな」
	辮(φera)	篋(pi)「へら・すきぐし」	film「薄膜」
			plane「平面」
			plate「皿」
			palm「手のひら」
			palate「口蓋」
			peel「木べら」
			velum「軟口蓋」
(19)	広し(φiroji)	———	broad「広い」(cf. Gk. <i>platús</i> 「平らな・広い」)
	尋(φirō)		area「地域」(L. <i>ārea</i> 「広場」)

上の(19)に示したようにギリシャ語 *platús* は「平らな」と「広い」という二つの異なる意味を表すが、これは「平らで、かつ広い」ものである「原」がその語形成にかかわったことを如実に物語っている。

「原」を表す語から派生したと見なしうるものに、「少ない」こと、「小さい」こと、あるいは「ばらばらなさま」を表す次の(20)のような語がある。「原」には人や物、とくに樹木が「まばら」であることから、そういう意味が生まれたのでは

ないかと想像される。しかしこれらの語は、とくに「原」とは関係なしに、「周辺」が「中心」に比

べて一般的に貧弱であるというイメージに触発されて生まれた語である可能性もある。

(20) 散(bara)	乏(fǎ)「乏しい」	few「少しの」
	微(wēi)「小さい」	little「小さい」
	寥(liáo)「まばらな」	lean「やせた・乏しい」(OE. <i>hlǣne</i>)
	吝(lìn)「けちな」	

これらの語は、「原」との関係がいかなるものであったにせよ、「原」を表す語と究極的に同源である。すなわち、中国語の「乏(fǎ)」と「微(wēi)」、および英語の few は、祖形として想定される *pala の *pa- を受け継いだものであろう。「乏(fǎ)」と「微(wēi)」の語頭音がかつて[p/b]であったことは、日本語の「音読み」で「乏」が[bō]、「微」が[bi]であることから明らかである。一方、中国語の「寥(liáo)」と「吝(lìn)」、および英

語の little の li- と lean の lea- の部分は、同じ祖形の *-la を受け継いだものであると推定される。少なくとも英語の lean に関しては、古期英語においてそれに h- が付いていたことから判断して、語頭音節の脱落が起こったことは確かである。

次にもう一つ、確証は得られないが、「原」を表す語から派生したと想像される例をあげておきたい。

(21) ———	藍(lán)「青い」	pale「蒼白な」
	緑(lǜ)「緑の」	pallid「青白い」
		purple「紫色の」
		blue「青い」
		brown「褐色の」
		vert「緑の」
		virid「新緑の」

ここで注目されるべきは、異なる色を表すいくつかの語が英語では [p/b/v] という音に始まり、[l/r] の音を含むという事実である。この事実は、それらの語が共通の源から発したものであるということを示唆している。そして筆者は、「原」を表す語がその源であったと推測する。「原」は、そこが草原であったら、緑に見える。また、遠くに見える「原」は青かったり、青白かったりする。土がむき出しの「原」であったら、褐色に見えたりもしよう。このような事実があればこそ、いくつかの色彩語の起源を「原」

に求めるのだが、まったく別の考え方として、「表面」を表す異なる形態が異なる色彩を表すようになった可能性のあることを付言しておきたい。いずれにせよ、(21)の語が「周辺」概念を表す *pala/para の後裔であることに変わりはない。

ここまで本節では「原」を意味する語からどのような語が派生したかを論じてきたが、以下では、「周辺」という一般的概念が「中心」という概念との対立の中でどのような語を生み出したかを見てみたい。最初に、次の(22)～(26)の語を取りあげる。

(22)	———	隣(lín)「隣り」 林(lín)「林」	fore「前面」 forest「森林」(L. <i>forestis</i> holt「雑木林」「外」)
(23)	奥(oku) 横(yoko)	奥(ào)「奥深い」 横(héng)「横」 後(hòu)「後ろ」	back「後ろ」
(24)	万(yörödu)	———	all「すべての」(OE. <i>eall</i>)
(25)	———	汎(fàn)「平凡な・あらゆる」	pan-「全・総・凡」(Gk. <i>pan</i>)
(26)	———	反(fǎn)「反対の」	anti-/ant-/anth-「反・非・抗」(Skt. <i>ánti</i>)

まず上の(22)について言うと、ここに示した語の祖形は *pala/para である。中国語の「隣(lín)」と「林(lín)」は *pa- を継承した部分が脱落した形である。語末の -n は「場所」を表す *-na が弱化したものかもしれない。forest の -st および holt の -n は、「場所」を表すために付加された音節の残滓であるにちがいない。ところで、「林(lín)」と forest の本来の意味は、「中心」である住处・人里の「付近」ないしは「そば」というほどのものであったろう。要するに、住处・人里の「付近・そば」が「森」や「林」であったため、「付近・そば」を表す語が「森・林」を意味するようになったのである。この推論は、ラテン語の *forestis* が「外」を表すという事実によって一つの裏付けが与えられる。

(23) の語は *paka に溯る。日本語の「奥(oku)」の o- と「横(yoko)」の yo- は *pa- が弱化した形である。中国語では「奥(ào)」(推定の古代音は [uk]、中古音は [uŋ]) が pa- を引き継ぎ、かつては [k] ないしは [g] という音に始まった「後(hòu)」が -ka を引き継いでいる。一方、「横(héng)」に関しては、hé- の部分が *pa- に溯り、-ng の部分が *ka に溯る。このように中国語の語末音 -ng が祖形の *-ka を引き継

ぎ、これが日本語の [k] を含む音節と対応する例は、ほかにも多く存在することを強調しておきたい。ちなみに、「後ろ」を意味する語として日本語に「後(ato)」があり、英語に back とは別に hind と rear があるが、「後(ato)」は *pata に、hind は *pana に、rear は *pala/para に由来する形である。

次に(24)と(25)に示した語について言うと、これらは祖形こそ異なるが、意味の派生過程は同じである。すなわち、(24)における語は *pala/para に溯り、(25)における語は *pana に溯る形であるが、それらの語の本来の意味は「周辺を含んだ」であった。「中心」に「周辺」が加わることによって事はあまねく行きわたり、「すべての・あらゆる」と言いうる事態が成立するというわけである。

一方、(26)に示した語は(25)における語と同様に *pana を祖形とするが、(25)の語とは違って「中心」と「周辺」の排他的関係を基盤にして成立した語である。すなわち、(26)の語における「反対の」という意味は「中心ではなく周辺の」という意味に端を発したものである。

このような「中心」概念と「周辺」概念との対立を通して生まれた別の語として、中国語には「半

分」を意味する「半 (pàn)」や「部分」を意味する「部 (pù)」が、英語にも同じ意味を表す half や

part が存在するが、この種のものの中でとくに注目しておきたいのは次の形態である。

(27) 否 (ina)	不 (pù)「～ない」 非 (fēi)「～でない」 否 (fǒu)「いいえ」	in-/un-「無・不・非」
--------------	--	----------------

これらはすべて、*pana に溯る形態である。日本語の「否 (ina)」は祖形の [p] を継承した音がだんだんと弱化し、ついにはそれが失われた形である。中国語の「不 (pù)」、「非 (hēi)」、「否 (fǒu)」は祖形の *pa- の部分を引き継ぎ、*-na の部分を失った形である。一方、英語の in-/un- は *pana の二つの音節を受け継いでいるが、第2音節を構成していた母音を失ってしまっ

ている。

上では新しい語を派生させた要因として「中心」と「周辺」の対立を強調した。しかし、このような対立には強弱がある。以下では、そのような対立が顕著ではない事例、つまり次の例におけるように、語の派生過程において「中心」概念の関与が希薄であるように思われる事例について考察する。

(28) ———	偉 (wěi)「すぐれて大きい」 富 (fù)「富んだ・豊かな」 黎 (lí)「多い」 量 (liàng)「数量・分量」	plenty「豊富」(L. <i>plentas</i>) weal「福利」(OE. <i>wela</i>) large「大きい」(L. <i>largus</i>) lot「たくさん」(OE. <i>hlot</i> 「一部」)
(29) 太し (tutoji) 太る (tutoru) 詰む (tumu) 積む (tumu)	肥 (féi)「太った」 多 (tuō)「多い」 太 (tài)「大きい・高い」 大 (tā)「大きい」	fat「太った」 tomb「墓」(AF. <i>tumbe</i> <Gk.) tumid「腫れた」(L. <i>tumeo</i>) tump「小山・土盛り」 tumulus「墳丘・塚」
(30) 代・世 (yō)	永 (yǒng)「永く」 遠 (yuǎn)「遠い」	aeon「永遠」(GK. <i>aiōn</i> 「時代・年令」)
(31) ———	陰 (yīn)「日陰」 影 (yǐn)「影」 暗 (àn)「暗い」	umbra「影」(L. <i>umbra</i> 「陰」) wan「青ざめた」(OE. <i>wann</i> 「暗い」)

上の (28) に示された語の祖形として想定される形は *pala である。中国語ではいずれの語も *pa- か *-la の一方を引き継いでいるが、英語では plenty と weal がその両方を、large と lot

は *-la を引き継いでいる。lot は古期英語では hlot であり、*pa- の残滓 h- の存在が注目される。いずれにせよ、(28) の語は「周辺」部分が一種の「ふくらみ」のようにイメージされて生まれた語

である。ちなみに、これらの語と同源とは言えないが、同種の派生過程を有する日本語として「大・多(oφoφi)」と「大らか(oφoraka)」をあげることができる。

(29)にあげた語は(29)の語と同様に「周辺」部分を「ふくらみ」としてイメージした語であり、その祖形として*pataが想定される。ただし、日本語の「詰む(tumu)」と「積む(tumu)」、英語の tumid と tomb が*pataの後裔であるという考えには状況証拠しかない。すなわちこの考えは、「詰む」を表す英語の fill と pack がそれぞれ「周辺」概念を表す*pala/paraと*pakaに由来したものであり、「積む」を表す英語の pile が fill と同じく*pala/paraに由来したものであると言えるので、「詰む(tumu)」と「積む(tumu)」、およびこれと関係の深い意味を表す tumid と tomb も「周辺」概念を表す形態から生まれたものであろうという推定である。

(30)にあげられている語は、いずれも「周辺」概念を表す*panaから生まれた語である。しかし、「周辺」概念が本来的に備えている空間的意味は、中国語の「遠(yuǎn)」以外の語にはもはや認められない。すなわち、日本語の「代・世(yō)」、中国語の「永(yǒng)」、英語の aeon のい

ずれも、「遠い所」という空間的意味から派生した「永い時」という時間的意味を表している。なお、英語の eternal「永遠の」という語はラテン語の aetās「時代・年令」、aetenas「永遠の」に由来する語で、究極的には祖形の*pataにまで溯るが、その語の意味的な派生過程は*panaに溯る(30)の aeon などと異ならない。

(31)にあげた語の派生過程は単純である。日なたに物があると、その「端」に「陰・影」ができる。そこで、「端」を意味する語が「陰・影」を意味するようになったのである。また「陰・影」は「暗い」ので、同じ語から「暗い」という意味の語が中国語に生まれたのである。なお、中国語の「陰(yīn)」、「影(yǐn)」、「暗(àn)」と英語の wan はいずれも*panaを引き継いだ形であるが、英語の umbra は*panaを継承したum-に*pala/paraを継承した-braが付加された形、つまり日本語の「端(pana)」と「縁(peri)」が結合したような形をしている。

本節の最後に、問題の語が同源であるとは断じられない事例と、問題の語がどのような語から派生したのか明らかでない事例にふれておきたい。前者の例として次の(32)を、後者の例として(33)をあげる。

(32)	蔞(ira)	楼(lōu)「(2階以上の)建物」	pile「杭」(L.pilum)
	薨(iraka)	辣(là)「辛い」	prick「とがった物」
	苛つ(iratu)		irritate「いらいらする・ヒリヒリする」(L.irrito)
(33)	厳し(ikafi)	威(wēi)「脅す・脅かす」	pigue「立腹」(F.piguer「怒らせる」)
	怒る(ikaru)		

上の(32)における「蔞(ira)」とは「草や木のとげ」のことであるから、それが「高くてとがった所」を表す「薨(iraka)」に転じたり、「いらいらする」という意味の「苛つ」に転じたとしても

不思議はない。中国語の「楼(lōu)」も「高くてとがった物」と言えそうなので、その成立過程は「薨(iraka)」のそれと同じかもしれない。また、「辣(là)」の「辛い」という意味は英語における

irritate の「ヒリヒリする」と基本的に同じであるし、irritate の「いらいらする」は「苛つ」の意味と同じであるから、これらが同源である可能性は小さくない。

一方、英語の pile は「とがっている」という点において「薊 (ira)」と似ているので、これらの語の歴史的関連性は無視できない。想像力をさらに逞しくすれば、「とげ」のある代表的な植物である「バラ」を表す英語 rose (L.rosa) が「とげ」を表す *para に由来するという仮定、す

なわち rose は、*para に由来する「とげ」を表す語が語末に「草」を表す音節 -sa を付加された後に、*pa- を引き継いだ語頭音節を脱落させたものであるという仮定を導くことができる。このような仮定が事実とすれば、日本語の「薊 (ira)」と英語の rose「バラ」は同源で、rose の原義は「とげのある草」であったということになる。

(33) にあげた語の由来についても述べておきたい。筆者の推定によれば、(33) の語を派生させたのは次の語である。

(34) 矛 (phōkō)	矛 (máo)「矛」	pike「穂先・矛・つるはし」
	戈 (kǎ)「矛」	

これらの語の祖形として想定されるのは、*paka である。*paka の *pa- は、*pala/para や *pana や *pata の *pa- と同じ、「周辺」概念を表す基本的形態であった。一方、*paka の *-ka は *-la / -ra や *-na や *-ta と同種の、「場所」を表す形態であった。このような *paka が子音と母音の交替を通じて日本語の「矛 (phōkō)」となったり、英語の pike となったりすることはあっても、中国語の「矛 (máo)」や「戈 (kǎ)」にはなりえないと思われるかもしれないが、「矛 (máo)」の [m] は「昌 (mào)」や「貿 (mào)」などの [m] と同様に元来は [p/b] であったと推定される。したがって、中国語では「矛 (máo)」が祖形の第1音節を引き継ぎ、「戈 (kǎ)」が祖形の第2音節を引き継いでいると考えるのはきわめて自然なことである。

問題はむしろ、「矛」と(33)における語との意味的な関連、つまり「矛」という意味から「厳し (ikaji)」や「怒 (ikaru)」や「威 (wēi)」などの意味が派生するかどうかである。確証こそないものの、そのような変化は十分に起こりうる、というのが筆者の考えである。ここで蛇足を述べておけば、日本語の「誇る (phōkōru)」という動詞も「矛 (phōkō)」から生まれた語であると筆者は考えている。

3. 形、囲い、そして空洞

この節で論じようとする内容は、「周辺」概念を表す形態が、ものの「形」、とくに「丸い形」を、そして「囲い・囲われたもの」、「空洞・空っぽ・無」を表すようになった、ということである。これを説明するため、まず最初に次の例をあげる。

(35) 鞠 (mari)	閉 (pì)「閉める」	ball「球」
丸・円 (maro/maru)	圍 (wéi)「周囲」	bell「鈴」
檻 (wori)	牢 (láo)「牢・檻」	beret「ベレー帽」
	籬 (lí)「垣根」	block「塊・ふさぐ」
	鈴 (líng)「鈴」	bowl「鉢」

輪 (lún)「輪」		bread「パン」
		bulb「球根・球」
		bur「毬(いが)」
		felly「輪縁」
		fold「檻・囲い」
		form「形」
		frame「枠」
		orb「球」(L. <i>orbis</i> 「輪」)
		lid「ふた」(OE. <i>hlid</i>)
		loaf「パン」(OE. <i>hlāf</i>)
		loop「環・輪」
		roof「屋根」(OE. <i>hroof</i>)
		round「円・丸い」
(36) 塀 (pei)	盤 (p ^b án)「大皿・お盆」	pan「平鍋」
罌 (wana)	瓶 (p ^b ín)「瓶」	pen「檻・囲い」
輪 (wa)	罌 (mín)「罌」	bin「瓶」
江 (ye)	藩 (fān)「垣根」	bonnet「ボンネット」
	圓 (yuán)「円・丸い」	vein「血管」(L. <i>vena</i>)
	垣 (yuán)「垣根」	venter「腹」
	碗 (wǎn)「茶碗」	fen「沼地」
	湾 (wān)「湾」	fence「垣根」

上の (35) にあげた語はいずれも、*pala/pala に溯る。日本語の「鞠 (mari)」と「丸・円 (maro/maru)」が不審に思われるかもしれないが、これの語における [m] は [b] に由来するものであろう。このような変化が起こりうることは、「冠る (kaburu/kamuru)」や「頭 (tuburi/tumuri)」などの語によって一つの裏付けが得られる。中国語に関しては、いずれの形態も第1音節か第2音節を継承している。すなわち、「圍 (wéi)」は祖形の第1音節を、「輪 (lún)」と「牢 (láo)」と「鈴 (líng)」と「籬 (lǐ)」は祖形の第2音節を受け継いだものである。一方、英語には祖形における二つの音節を受け継いだものと、第2音節

だけを受け継いだものがある。lid と loaf と roof の古期英語形に見られる h- は、*pa- の残滓であろう。なお、従来の語源辞典に説かれていることとは相容れないが、英語の wheel「輪」や ring「輪」(<OE. *hring*) や ring「鈴・鳴る」(OE. *hringan*) もここにあげた語と同源の可能性があると筆者は考えている。

(36) にあげた語は *pana に溯ると見なしうる。ただし、「塀 (pei)」と「輪 (wa)」と「江 (ye)」に関しては、それらが *-la/-ra ではなくて、*-na を脱落させたという証拠はない。中国語の「罌 (mín)」の [m] は、「敏 (mǐn)」や「憫 (mǐn)」における [m] と同様に、[b] に溯る音であると推

定される。

さて問題は、意味である。(35) と (36) の語は、英語の form「形」という語は別にして、「丸いもの」ないしは「囲い・囲われたもの」に関係がある。このような意味と「周辺」概念との間にどのような関連があるのか。

この疑問を解く鍵は「形」という概念に隠されている。ものの「形」を人が認識するのは、その「輪郭」によってである。そして「輪郭」というのは、何の「輪郭」であるにせよ、「周辺」そのものである。英語の from「形」も、また「丸い形」を表す「輪(wa)」や「輪(lún)」などの語も、その本来の意味は「輪郭」であったにちがいない。そし

て、「輪郭」という意味が「丸い輪郭」という意味に特化されるに至ったのは、自然界に観察されるさまざまな「輪郭」の中で「丸い輪郭」がいちばん目立ったからであろう。なるほど「四角形」や「三角形」というのも人目を引く形ではあるが、このような形をしたものは人工物であるのが通例で、大昔の人々にとっては馴染の薄い形であったと考えられる。

ところで、「周辺」概念を表す形態が「丸いもの」あるいは「囲い・囲われたもの」を表すようになった例は、上の(35)と(36)に示した語以外にも多く見られる。そのような例をいくつか下にあげてみよう。

(37)	秀罇(φodari)	鉢(pō)「鉢」	pot「壺・鉢・瓶」(L.* <i>pottus</i>)
	鉢(φati)	陶(t ^h áo)「陶器」	boot「ブーツ」
	女陰(φoto)	筒(t ^h ōng)「筒」	bota「革袋・ボタ」(Sp. <i>bota</i>)
	瓮・缶(φotoki)	桶(t ^h ōng)「桶・樽」	butt「大酒樽」(L. <i>buttis</i>)
	器(utuφa)	樽(tsūn)「樽」	bottle「瓶」
	樽(taru/tari)		vat「大桶」
	壺(tubo/tuφu)		uterus「子宮」(L. <i>uterus</i>)
	坏(tuki)		tub「桶」
	筒(tutu)		tube「管・筒」(L. <i>tubus</i>)
			tun「大酒樽」(OE. <i>tunne</i>)
(38)	台(utena)	房(fāng)「家屋・建物」	hut「小屋」
	殿(tōnō)	塔(t ^h ǎ)「塔」	temple「神殿」(L. <i>tempus</i>)
		堂(t ^h áng)「堂・広間」	tower「塔」(Gk. <i>turris</i>)
		邸(tì)「邸宅」	
		殿(tiàn)「邸院・宮殿」	
(39)	蓋(φuta)	帽(mào)	hat「帽子」
(40)	頭(du/tuburi)	頭(tóu)	bead「ビーズ・数珠玉」
	玉・珠(tama)		head「頭」
	粒(tubu/tubī)		
	円(tubura)		

(41)	墓(φaka)	包(pāo)「包む・包み」	pack「包む・包み」
	箱(φako)	抱(pào)「抱く」	poke「子袋」
	袴(φakama)	墓(mù)「墓」	pouch「子袋」
	埃(φokori)	幕(mù)「幕」	bag「袋・カバン」
	陰囊(φuguri)	覆(fù)「覆う」	bucket「バケツ・手桶」
	袋(φukuro)	服(fú)「服」	hatch「ハッチ」
	育む(φagukum)	腹(fù)「腹」	hug「抱きしめる」
	叢祠(φokora)	衣(yī)「衣服」	
	葺く(φuku)	擁(yōng)「抱く」	
	麻笥(wokē)	育(yù)「はぐくむ」	
	垢(aka)	埃(āi)「埃」	
		垢(kòu)「垢」	
		袴(kù)「ズボン」	
(42)	腹(φara)	被(pèi)「掛け布団」	belly「腹」
	瓜(φuri/uri)	籠(lǒng)「覆う」	bury「埋める」
	風呂(φuro)	爐(lú)「こんろ」	vale「谷」(L.vallis)
	倚盧(iro)		veil「ヴェール」(L.vela)
	抱(ye)		hold「手に持つ」
			wall「壁」
			ware「陶器」
			wrap「包む」

上の(37)にあげた語は、*pataを祖形とする。まず日本語の「鉢(φati)」について言うと、これはサンスクリットの音訳「鉢多羅」を略したものであるとされているので、ここに載せるのは不適切かもしれない。次に「器(utuφa)」について言うと、これは「うつわもの(utuwamono)」の略だとされている。「わ(wa)」は「輪」、「もの(mono)」は「物」のことで、「うつ(utu)」の部分が祖形の*pataを受け継いでいる。一方、「樽(taru)」や「壺(tubo/tuφu)」などでは祖形の*pa-に相当する部分が完全に失われるとともに、-ruや-bo/-φuなどの音節が付加されている。-ruは英語のuterusの-ruと、そして後で取りあげる「空・

虚・洞(uturo/uturo)の-roと同源であろう。また、-bo/-φuは後で取りあげる「空(utuφo)の-φoと同源で、本来の意味は「輪」であったと考えられる。なお、「たけの高い、口の付いた樽」を表す日本語の「秀罎(φodari)」のφo-は「突き出て、たけ高い」を意味すると『岩波古語辞典』に記されているが、これは*pa-の後裔と見るのが妥当ではなかろうか。中国語では「鉢(pō)」が祖形の第1音節*pa-を引き継ぎ、他の語は祖形の第2音節*-taを引き継いでいる。英語ではtubeとtunが祖形の*pa-を完全に失ってしまっている。tubeは日本語の「壺(tubo)」と、tunは中国語の「樽(tsūn)」と形がよく似ていることが注目され

る。形が似ていると言えば、今は廃用となった英語の fat「器」(<OE.*fæt*) は日本語の「鉢 (phati)」と非常によく似ている。この類似性は、これらの語が同じ源から発したものであることを意味するが、これらの語によって表されるもの、つまり「壺」や「鉢」や「樽」が5、6万年も前から存在したことを意味するものではない。同じことは次の(39)の語についても、また本稿で取りあげている他の多くの語についてもあてはまることを強調しておきたい。

(37) の語が「入れ物」を表しているのに対して、(38) の語はいずれも「建物」を表している。そして、いずれの語も *pata に溯ると見なされる。しかし、ほとんどの語が祖形の姿をあまりとどめていない。祖形における *pa は、「高殿・御殿」を意味する「台 (utena)」の u- と、「房 (fān)」と、hut の hu- にその面影が見られるだけであり、他の語においては完全に失われてしまっている。

(39) にあげた語は *pata の後裔で、「覆うもの」というのが原初的な意味である。「帽 (mào)」の [m] がかつて [b] であったことは歴史的な事実であり、この語が祖形の *pa- を引き継いだものであることは疑いを入れない。なお、「帽子」を表す語には、hat のほかに、(35) に示した beret「ベレー帽」(<*pala/para) と、(36) に示した bonnet「ボンネット」(<*pana) があるが、これらも「覆うもの」というのが本来の意味であった。

(40) にあげた語も *pata に由来するものであるが、これらの語に関しては「丸いもの」というのが本来の意味であった。このことは、「頭」を表す [tuburi] という音と、「円」を表す [tubura] がほぼ同一であることからしても明らかである。それにしても、(40) にあがっている日本語と中国語には *pa- を継承したと見なされるも

のが何も付いていない。それがかつては存在したというのは推定である。そしてこの推定は、英語の bead と head に *pa- の後裔と見なされる bea- と hea- が存在することを拠り所としている。なお、「頭 (atama)」の a- は *pata の *pa- を受け継いだものにちがいないが、「頭 (atama)」というのは「頭の前頂、乳児のひよめき」(『岩波古語辞典』) が原義であるということなので、ここで取りあげている語の由来を解き明かすための手助けとはならない。

(41) であげた語は *paka から発したものであると見なされる。ただし、中国語の「包 (pāo)」と「抱 (pào)」と「衣 (yī)」については、それが *ka- を失った形であり、*-la/-ra あるいは *-ta あるいは *-na を失った形ではないという決定的な証拠はない。一方、「墓 (mù)」と「幕 (mù)」、および「覆 (fù)」、「服 (fù)」、「腹 (fù)」、「育 (yù)」は、[m] あるいは [f] の音によって *pa- を引き継いでいることを確認できるとともに、日本語のいわゆる「音読み」に現れる [ku] の音と古態をとどめる広東語に残っている [k] の音によって、祖形の *ka が失われた形であると断定できる。「擁 (yǒng)」については、yǒ- が *pa- の後裔で、-ŋ は *ka の後裔である [k] が音便化したものであろう。また、英語の pouch と hatch における -ch と -tch は [k] が軟口蓋音化したものであるから、それが *ka の後裔であることは明瞭である。なお、「神を祭る小さな社」を表す日本語の「叢祠 (φokura/φokora)」は、『岩波古語辞典』によれば、「神宝を納めておく倉」あるいは「社・祠」を意味する「神庫・宝倉 (φokura)」が転化したものであり、φo- は「高くつき出たもの」、-kura は「高くして物をのせる場所」であるというが、これは筆者の見解とは明らかに異なる。私見では、(41) にあげた語はすべて

「覆う」こと、ないしは「包む」ことがイメージされた語である。そして「神庫・宝倉 (pókura)」もまた、その種の語であると考ええる。ついでにもう一つ、従来の説明に見られる過ちを指摘しておきたい。『岩波古語辞典』によれば、「育む (págukumu)」は「羽 (pa)」と「含む (pukumu)」とが合わさったものであるというが、この語は -págu と -kumu とが合わさったものであり、-págu は中国語の「抱 (pào)」、「育 (yù)」や英語の hug に対応する形で、-kumu は「組む (kumu)」ないしは「込・籠む (komu)」に対応する形であろう。

(42) の語は *pala/para を祖形とするが、これらの語も「囲う・覆う・包む」というイメージに基づいた語である。たとえば、「風呂 (puro)」とはもともと「戸棚式の蒸風呂」であったというから、「囲われたもの」である。同様に、「倚盧 (iro)」とは「天子がこもる仮の屋」のことであったから、これも「囲われたもの」である。また、「胞 (ye)」とは「胎児を包んでいる膜」のことであるから、それは「包んでいるもの」にほかならない。なお、この「胞 (ye)」を *pala/para の後裔と見なすのは、この語が次稿で取りあげる「同腹 (ira/iro)」の姉妹語と考えられるからである。

「囲う・包む・覆う」という考えは、上記以外の語についてもその由来を説明する手立てとなる。たとえば、水を汲むための「井戸 (ido)」と well「井戸」は *pata と *pala/para の後裔で、本来の意味は「水をせきとめるための囲いが設けられている所」であったと見なされる。そして「稲 (ina/ine)」、「米 (yona/yone)」と rice「米」

は、*pana と *pala/para の後裔で、粉を「殻に包まれたもの」と見ることによって生まれたものであると推定される。また、「色 (iro)」は *pala/para の後裔で、本来は「中身を覆うもの」すなわち「表面」という意味であったと思われる。「表面」は「外観」であり、「外観」は「色」によって大きく左右されるので、そのような変化が起こったのであろう。ちなみに、英語の color「色」は hull「殻」(<Gmc.*xul- < IE.*kel-「覆う」)と、また日本語の「殻 (kara)」と同源であると考えられる。蛇足としてさらに別の語をあげれば、*pata に由来する「腕 (ude)」、*pana に由来する「腕 (wàn)」、*pala/para に由来する arm「腕」、*pana に由来する「船・舟 (puna/pune)」(ラテン語の nāvis「船」と同源か)、*pata に由来する boat「ボート」(日本語の「船・舶 (tumu)」と同源か)なども同種の例である。

このように「囲い・囲われたもの」という概念、あるいは「覆い・覆われたもの」、「包み・包まれたもの」という概念は新しい語を派生させるうえで大きな力を発揮したが、この概念からさらに新しい概念と新しい語が誕生した。「空間」や「空洞」を表す語である。つまり、「鉢 (pāti)」や「箱 (pako)」、あるいは「蓋 (pata)」がいわば「外側の囲い」を表す語であるのに対して、また「墓 (paka)」や「稲 (ina/ine)」、あるいは「井戸 (yido)」が「外側の囲いとその内部の両方」を表すのに対して、「内部の空洞性」に着目した語、すなわち「穴」、「空間」、「空っぽ」、「非存在」などを表す語が生まれたのである。そのような語を下に示してみよう。

(43) 凹む (pekomu)	刨 (p ^h áo)「掘る」	vacuum「真空の」(L.vacuus)
空く (aku)	垚 (fā)「掘り起こす」	vacate「空にする」(L.vaco)
穿つ (ugatu)	窪 (wā)「くぼみ」	cave「洞穴」(L.cavus「空洞の」)

凹・窪(kubo)	凹(āo)「へこむ」	
	空(kōng)「空っぽの」	
	虚(cū)「空虚な」	
	穴(cué)「穴」	
(44) 穴(ana)	—————	antrum「空洞」(Gk. <i>antron</i>)
無し(nafi)		anus「肛門」(IE.* <i>āno</i> 「輪」)
		inane「空虚な」(L. <i>inanis</i>)
(45) 室・窟(muro)	無(wú)「～がない」	pore「毛穴・気孔」
間(ma)	零(líng)「ゼロ・無」	bore「穴をあける」
洞(ðora)	窿(lóng)「穴」	furrow「うね間」(OE. <i>furh</i> 「塹壕」)
掘る(ðoru)		air「空・空気」
虚(uro)		room「空間」
(46) 空・虚(utu)	洞(tòng)「穴・トンネル」	tunnel「トンネル」(OF. <i>tonne/tonne</i> 「酒樽」)
無戸室(utumuro)		
空(utuðo)		
空く(utuku)		
空・虚・洞(uturo/utoro)		

上の(43)の語は*pakaに溯る。中国語の「虚(cū)」と「穴(cué)」は*-kaの後裔で、[c]という音は[k]が軟口蓋音化したものである。日本語の「凹む(ðekomu)」に関してはðeko-の部分が、英語のvacuumとvacateに関してはvaca-の部分が*pakaに対応する形態である。また日本語の「凹・窪(kubo)」と英語のcaveは、*pakaの*pa-に相当する部分が語頭から消失し、語末に添加されている形態であろう。

(44)の語は*panaに溯る。「穴(ana)」は*panaの*pa-が弱化した形であろう。また、「無し(nafi)」は形容詞語尾の-fiが付加された後で、それが完全に失われた形であると推定される。antrumとanusは、言うまでもなく、an-とanu-の部分が*panaを受け継いだ形態である。anusに関しては、「肛門」という意味が

インド・ヨーロッパ祖語の*āno「輪」から派生したものであることに着目しなければならない。これは、「囲い・囲われたもの」を表す語から「穴・空洞・空っぽ」を表す語が生まれたという考えの裏付けとなる。

(45)の語は*pala/panaを祖形とする。日本語の「室・窟(muro)」と「間(ma)」における[m]という音は、先の(35)に示した「鞠(mari)」と「丸・円(maro/maru)」における[m]と同様に、[b]に由来する音であろう。「間(ma)」はもちろん、祖形の第2音節を失った形である。同様に、中国語の「無(mú)」も祖形の*-la/-raを失った形である。そしてこの語の[w]という音は、[p]>[b]>[m]>[w]という変化をたどったものであろう。中国語の「零(líng)」、「窿(lóng)」と英語のroomは、他の多くの語と同様に、祖形の第1

音節を脱落させた形である。ところで、英語の hole「穴」と hollow「うつろな」はここにあげた語と同源であるように思われるかもしれないが、後の稿でも論じるように、これらはインド・ヨーロッパ祖語の *qaul-/qul-「空の」に遡る語であろう。

(46) にあげた語は *pata に遡るが、*pa- の部分は日本語の「虚 (utu)」と「空 (utuφo)」にその残滓をとどめているにすぎない。「虚 (utu)」はその姉妹語「内 (utu/uti)」と、「空 (utuφo)」はその姉妹語「壺 (tubo/tuφu)」と比較されるべきである。また、中国語の「洞 (tòng)」は「棟 (tòng)」や「堂 (táng)」や「冬 (tōng)」など「空洞・空っぽ・無」をイメージさせる語と比較されるべきであり、英語の tunnel も pot「壺・鉢・瓶」や vat「大桶」など内部が「空洞」なものを表す語と比較されるべきである。なお、英語の tunnel が古期フランス語の「酒樽」を表す語に遡るという事実も、「囲い・囲われたもの」から「穴・空洞・空っぽ」への意味変化があったという考えを支える一つの根拠となる。

本節では「周辺」概念を表す原初的形態から「囲い・囲われたもの」などを表す語が派生し、またここから「空洞・空っぽ・無」を表す語が派生したことを述べてきたが、「周辺」概念を表す形態に端を発した意味変化の連鎖はこれで論じ尽くされたわけではない。次の稿では、「空洞・空っぽ・無」を表す語から「光」や「人」や「感情」、さらには「存在」を表す語さえもが原始ユーラシア語に誕生し、それらが日本語と中国語と英語に受け継がれていることを論じる予定である。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編纂処編 (1986) 『中日大辞典』(増訂第二版)大修館書店。
 大野 晋ほか編 (1974) 『岩波古語辞典』岩波書店。
 白川 静編 (1994) 『字統』(普及版)平凡社。
 寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』研究社。
 中村幸彦ほか編 (1982-2003) 『角川古語辞典』(全5巻)角川書店。
 前田富祺監修 (2005) 『日本語源大辞典』小学館。
 Klein, Ernest (1971) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*.
 Amsterdam: Elsevier Scientific Publishing Company.